

って活躍された)の骨学の講義では、手ぶらで入ってこられた教授がいきなり滔々とラテン語を羅列され始めたことを記憶している。

ところが、昭和四十年代から医学部建築の計画があり、この講堂が壊されることがわかり職員、同窓生にこの由緒ある建築物の保存の機運が起り、無事中央講堂脇に移転保存された。われわれ同窓生は昔を偲ぶ対象が永久に存在されることを喜んだものであった。

しかし、医学部近代化と称する無計画な新建築が、突然この講堂を破壊してしまったのである。

この破壊計画を耳にしたとき、一刻も早く保存された解剖学講堂を、再移転しなければと同窓会誌に訴えた。この原稿が受理されたとき、「もう崩され始めていますよ」と受付女性の返答を耳にし、啞然とし絶句してしまった。

この暴挙について教授会あるいは同窓会幹部に返答を求めると、以前からこの破壊は同窓会に計って決定されていたとのことであった。これを今更なじつてどうにもならないことは、重々わかっているけれども憤懣やる方ない思いは今に続いている。

未だ古い大学には医学に関係ある建築物が残っているはずである。この保存こそ子孫に伝える文化財の最たるもの

ではないかと、考えている。膨大な費用がかかることは承知の上で、破壊から救う賢明な方法を模索、実施するため、医史学会が立ち上がる必要があると切実に訴えたい。

この種の文化財の点検と保存対策を早急に開始して貰いたい。文化財保護審議会は民家、橋、環境などについて申請があれば検討して指定しているので、公費負担での方法も加味されて良いと思う。この点からのアプローチも是非考えて頂きたい。何よりも大切なことは、医学部の識者を含めた人達に、是非医学史の文化財保護に関心を持って貰うことである。

12 資料と私と目録

佐藤 允男

現今の病院図書室(館)や医学図書館は、それぞれの施設の知的中枢機能を求められている。

先人の生き方と残した資料を知りたくて平成二年の日本医史学会に出席した。そこで関西支部春季大会の案内を見て後、その会にいられて頂いた。会では寺畑喜朔先生が各地

の図書館を調査されたお話をされた。

平成四年に第八回病院図書室職員養成セミナーに参加し、また秋に国立国会図書館での見学会に参加した。

資料と地方に住む者との関係は、平成三年の松木先生の論文に言い尽くされている⁽¹⁾。

「研究結果と資料は共通の財産にすべき」との見地から平成五年に、

一・順仁堂図書目録 [B5 120P,] を作り、

またほぼ毎年、

二・順仁堂医史学資料 (仮) 目録 [A5 100P,]

三・逐次刊行物目録 [A5 16P,]

例年三〇部ずつ作り私共の院内と地域の図書館と医療関係者に配布してきた。今年はさらに一五部作り関西支部の一部の方に差し上げた。

形式は病院図書室研究会の諸姉に恵与された目録類・書誌学医史学の先達の作品を見習い、またNLM日本語版の考え方を参考にした。数が少なくまとめ易いし、一年の寿命と考へ、コピーで印刷に代えている。

日本医史学雑誌の岩治勇一先生⁽²⁾と石田秀一先生⁽³⁾、それに醫譚と北陸医史の寺畑喜朔先生⁽⁴⁾と正橋剛二先生の記事は参考になった。

石田秀一先生の悲鳴にも思えるお考えに対応できなく心苦しい。

それに、医療器械器具等は収納の関係で集録できてないし看板施設や住居先人の埜域も入っていない。日頃向上に務めてはいるが、函館での寺畑喜朔名誉教授の説かれることは貴いことと思う。おすすめをいただき一文とした。

* 文献 *

(1) 松木明知「地域の医学史」研究序説、『日本医史学雑誌』Vol. 37(4) 477-432 1991.

(2) 福井県人の誘導した西洋文化の啓蒙書、岩治勇一『日本医史学雑誌』38巻1号、東京

(3) 医学資料展(秋田県医師会主催)石田秀一編『日本医史学雑誌』Vol. 39(3), (91)-(99) P. 東京

(4) 長崎家関係資料「長崎文庫医学書目録」

長崎家所蔵の医学関係寫本目録、寺畑喜朔、(A5)6P、醫譚第61号別刷、大阪

長崎家所蔵の医学関係刊本目録、寺畑喜朔、(A5)3P、醫譚第63号別刷、大阪

補遺・長崎家所蔵の醫書目録、寺畑喜朔、(A5)3P、醫譚第66号別刷、大阪